

身体を鞭打たれるときは、決まって二つの音がする。

風を打つひゅおんという音と、皮膚に当たるピシリという甲高い音。それと波線状に残る鋭い痛み。攻撃はいつも不意打ちだった。

「いてっ！」

とぼくは背を仰け反らせる。実際、はじめてやられたときはかなり痛かった。背中にある筋が浮かんだし、しばらく経つとじんじんと熱を持って傷んだ。そうやって恋人の椎名がぼくを鞭打ちはじめたのは、ぼくが死んだあとのことだ。

ぼくが死んでしまったのは、二月下旬のまだ肌寒い日曜日のことだった。死亡推定時刻は、夜中から朝方にかけて。椎名がおやすみを言い、ぼくもおやすみを返し、そこからおはようの間までのこと。

ぼくの遺体の第一発見者は……ふざけるのもうよそう。一緒に寝ているぼくが死んでしまっていることに気付いたのは椎名だ。いつもどおり二人ともパジャマ姿で、毛布にもぐりこんでいた。

「ねえねえ、起きてよ」

安眠していたぼくの肩に手をやり、彼女はゆさゆさ揺さぶって起こした。

「……なんだよ」

「海《うみ》くんの心臓、動いてないみたいなんだけど」

「あれ？」

目やにの浮いたまぶたをこすりながら、ぼくは椎名を見上げた。

「ほんと？」

ベッドサイドの目覚まし時計を確認し、あくびを一つする。

「気のせいじゃないの？」

椎名はぼくの左胸に耳を当て、首を捻っている。ぼくもパジャマの裾から自分の左胸に手をあてがった。椎名がじつとぼくの顔を見ている。

目を閉じてしばらく集中していたが、確かに鼓動は感じられなかった。

「参ったな」

「心臓が止まっちゃうのって、よくあることだっけ？」

「よくわからないけど、あまりない気がする」

「心臓マッサージとか、した方がいい？」

「じゃあ、ちょっと頼む。ぐえ」

二人とも事態の緊急性がわからないので、どうにも間の抜けたやりとりになってしまふ。

「救急車呼ぼうか？」

「いいよ。歩いていく」

ぼくはベッドから起きだし服を着替えた。シャツを脱いだついでにまた胸に手を当ててみたが、やはり鼓動は聞こえない。

近所の病院に電話をかけた。心臓が止まっているようですがどうしたらいいでしょう、と訊くと、受付の女性は落ち着いた声で、それではお待ちしております、と返した。

よくあることなのかもしれない。

「ちょっと行ってくるよ」

「一緒行かなくていい？」

「そんなに大袈裟なことじゃなさそうだから」

部屋を出てアパートの階段を下りると、向かい家の庭にしゃもじの姿があった。ドッグフードの入ったプラスチックボックスの前に、お椀型の青いエサ入れを置いて、お座りをしている。ぼくが軽く手をあわせて拝んでも、知らんぷりでボックスを見つめていた。

徒歩五分の小さな病院には、時間潰しに来ている老人ばかりだ。受付で待っている間も、鼓動がないかどうか、何度も胸に手を当てて確かめた。

診察室に入ると、心臓が止まっちゃったんですって？ と初老の医師が笑って出迎えた。つられて、そうなんですよね、とぼくもつい笑いを返してしまった。

医師はぼくの胸に聴診器を当て、目を閉じてしばらく動かなかった。イヤホンで音楽でも聞いているように、ふんふん首を揺らす。なるほどと一つ頷いた。

「心音、聞こえますか」

「第九が聞こえますね」

ぼくは首をひねった。「第九？」

「ベートーベン」

ぼくは自分の胸を見下ろした。

冗談ですよ、と医師が肩を竦めた。いつものことなのか、脇に立った看護師はぴくりと

も反応しない。

老人との世間話ばかりで、少しずれているのかもしれない。きちんと診察をしてほしい。医師はもう一度聴診器をぼくの胸に当てた。目を閉じて耳を澄ませていたが、しばらくして首を振った。

「確かに聞こえませんか」

「やっぱり、止まってますよね」

「心電図をとってみましょうか」

上着を脱いで、診察台の上に横たわった。胸を中心に、ぺたぺたとシールのようなものを貼りつけられる。

医師が何かを操作すると、脇に置かれた小箱がピー、と甲高い電子音を発した。医師は小箱の画面を指した。

「心臓が動いていると、ここの線が波を打つんですよ」

「打っていませんよね」

「ベタ凧ですね」

船釣りでもしているような調子でそう言うと、医師は横たわったぼくを見下ろし、合掌

した。脇に控えていた看護師も倣った。

「ご臨終です」

確かにぼくは、人生の最期なんて呆気ないものなのだろうと思っではいた。どれくらい前から思っていたかといえば、たぶん小学生くらいの頃からだったと思う。でも実際に体験してみると、輪をかけて呆気なかった。

ぼく、死んじやったのか。

自分の胸を見下ろした。

椎名を連れてこなくて良かったかもしれない。飼っていたハムスターが病気に罹って死んだときも、ショックで丸一日何も食べられなくなってしまった彼女のことだ。ぼくが死んでしまったと知ったら、一日ともう一食くらい、何も食べられなくなるかもしれない。

医師は机の引き出しから葬儀屋の名刺を取り出し、ぼくに渡した。あまり良くない提携だなと思いつつ、名刺を財布の中に仕舞った。ご家族の方に説明するので、また来るようにと言われた。椎名にどうやって話そう。そう思いながら病室を出た。

お大事にどうぞ、とは言われなかった。

確かに納得はできるけれども、もう少し気遣いがあってもいいと思う。

*

「そこは、もう少し抵抗すべきだったんじゃない？」

昼食時、お好み焼き屋に入って鉄板を繰りながら、言葉を選び選びぼくが死んでしまったことを告げると、椎名はそう言っ眉根を寄せた。

「抵抗？」

「そういうときは、まだ俺、生きてるじゃないか！　って、お医者さんに食ってかかるべきだと思うのよね、私は」

椎名はテーブルの上に肘をついて、生地をひっくり返すぼくの手先を見ている。椎名が焼くとお好み焼きは空を飛ぶので、これはぼくの役目だ。

「そんな馬鹿な、って返すのが普通なんじゃないかなあ」椎名はじと目で言う。「海くん、どうしてすぐに受け入れちゃってるの」

「いや、だってさ」ぼくは抗弁する。「いきなり死んでるって言われたんだぜ」

「いきなりだからこそ、抵抗しなきゃじゃない」

「動かない心電図まで見たんだぜ」

「なんだかなあ。それでももうちょっと取り乱したりするのが、人としてのマナーだと思うけど。いつもながらマイペースすぎる」

椎名は吐息をつく。

「そん나다から、恋愛感情もわからないんだ」

そう言われてしまうと、ぼくはぐうの音も出ない。

ぼくには基本的に欲がない。食欲と睡眠欲くらいはあるのだが、性欲はからきし欠けている。恋愛感情もない。だから一緒に住んでいる椎名との仲を表す関係語も、恋人、というより同居人、という語彙の方がしっくりくる。椎名はそのことを不満に思っているらしい。

中学に入ってすぐの頃のことだ。クラスメイト達の話題の中心が、漫画やゲームの話から、急速に恋愛話や猥談にシフトしていった。ぼくは彼らのなんだかよくわからない熱気を見ながら、無理して背伸びをしなくても、そのうち自然にわかるようになるだろうになあと思うばかりだった。それから十年の歳月が流れた。未だに自然にわかるようにはなっ

ていない。

人に言って、信じてもらった経験はほとんどない。ぼくが打ち明けたときの周囲の反応は以下の数種類だ。ぼくが嘘をついていると考える人（冗談と受け取る人もいるし、ぼくがそうした自己演出が好きな奴なのだと考える人もいる）。病院を勧めてくれる人（機能的な部分に着目する人と、精神的な部分に着目する人に分かれる）。女じゃなければ男好きかと判断する人（何か言い寄られた経験があるのではないかと推察する）。理由の追及に燃える人は、トラウマというキーワードが大好きなので、こちらもサービス精神として、ありもしない虐待話とかでっちあげたくなる。

そして、まだ本当に好きな人に出逢えていないただだ、と諭す人。彼らはぼくを励ます。必ずいつかわかるときがくるからと。

そう言われてしまうと、自分が何か酷く大きな忘れ物をしている気がして、ぼくはがっくりにしてしまう。

ないことの証明はとても難しい。ないことを証明するには、あることが永遠にないことを、ずっと観続けなければならない。いつかわかるときがくる　いつか、いつか、いつか　ぼくはいつも自分の人生を保留しているような気分になる。だからぼくは、自分の

輪郭を形作ることがとても苦手だ。

だから、死んでしまったのかもしれない。

昼食を食べ終わると、二駅離れたデパートへショッピングに出掛けた。病院、来週予約したぞとぼくが言っていると、来週は遊園地に行きたかったのに、と椎名がばやいた。ぼくの死のことを、あまり聞きたくないのかもしれない。

ぼくとしては、これから自分がどうなってしまうのか、気になっている。瀕死の状態ならばともかく、既に死んでしまっているわけなのだし、今さらじたばたしても始まらないと思う。それでもやはり、不安はある。

デパートを二人でぶらついていると、椎名は何か思いついた様子で、おもちゃ売り場へ足を向けた。何を買うのかと思いついていくが、きよろきよろと見回しながら素通りしてしまう。今度はスポーツ用品売り場に入ってしまった。やはり見当たらないように、さっさと行ってしまふ。ぼくは漕いでいたエアロバイクを下り、椎名の後を追った。

「何探してるんだ？」

「ちよっとね」

椎名はにやりと笑う。教えたいうような、秘密にしたいいうような、そんな迷う自分の気持ち

さえ楽しんだ、複雑な悪戯笑いだ。

「ヒントは？」

「海くん、甘いね。人生、常にヒントを貰えるものとも思ってる？」

「答えを言いたくなくてもヒントを言いたい人は、結構多いと思ってる」

「海くん用に」

目当てのものは、文具用品売り場にあった。レジの脇の籐の籠の中に、剥き出しの状態で、様々な色のものが詰め込まれている。半透明のプラスチックの握りが二本に、それを繋ぐビニールロープ。

縄跳びだ。

椎名は籠の中をこそごと探ると、ブルーの一本を手にとった。

引き籠もって死後硬直が進んだりしないよう、ばくに運動でもさせるつもりなのだろう。ぼくとしては、今さら健康的な生活に挑むのは、ナンセンスだと思うけれど。どうしたって不健康なわけだから。

デパートから出ると、駅へ向かった。交差点で信号待ちをしているあいだ、これからのことを考えていた。

まず死亡届を出す必要があるだろう。生命保険には入っていただろうか。通夜と葬儀の準備もしなければならない。いつ入居するかは別として、墓も必要になってくる。

頭の中でチェックリストを作って考え込んでいると、背中でこそごと音がした。

「しい。アパートのことだけど」

首を振り向けたとき、ひゅんっ、と音がした。

風切音。

同時に、ピシッと甲高い音が弾けた。背中に鋭い痛みが走った。

「いてっ……！」

思わず飛び上がって背中を抑えた。道路に飛び出しそうになり、通り過ぎた車が驚いてホーンを鳴らす。

反射的に振り返ると、椎名がこちらをじっと見ていた。

右手に縄跳びの取っ手を二本まとめて握り締め、ちょっと驚いたように目を見張っている。

「何すんだよっ」

椎名は吐息をついた。「……ああ、びっくりした」

どう考えても、びっくりする権利があるのはぼくの方だけだと思うのだが。

「痛かったの？」

「あたりまえだろ」

「死んじゃったら、もう痛くないのになって思っで。つい」

つい、じゃないだろう。好奇心で加虐行為に及ぶのはやめてほしいものだ。

椎名はすまなさそうな顔をして、シャツの上からぼくの背をさすった。

犬の頭でも撫でるようにさすりながら、何か重要な学説でも発見したように呟いた。

「そうか。海くんでも痛いんだね」

嫌な予感がした。

それからだ。彼女がぼくを鞭打つことを、趣味にするようになったのは。

2

ひゅおん。

風切音がするとぼくは反射的に首を竦める。気が休まらない。

ピシッと自分の身体が打たれる音と同時に痛みが走る。

「ってえー！」

飛び上がった背中を押さえる。押さえながら後ろを振り向く。

振り向くと、椎名はえへへと何故だか世にも嬉しそうな笑顔を浮かべている。それで、怒ろうとしていたぼくは毒気を抜かれてしまう。

椎名は自分で打っておきながら、妙に愛おしそうにぼくの背中 of 痕をさするので、それでまたなんとなく怒れない。少しでも隙をみせるところだ。自分の死のことでいっぱいいいっぱいなのに、困ってしまった。

椎名のことか、ぼくにはいつもよくわからない。

知り合ったのは二年前、ネットゲームの中でだ。その頃、彼女はリアルで言葉を喋ることができなくなっていた。おばあちゃんが亡くなって半年した頃、発作のように、急に言葉を発せなくなるようになったらしい。

【言葉自体は頭にあるんだけど、なんか口から出てきてくれないんだよね。文字を打つのはなんともないんだけど】

ゲームの中で、椎名はぼくにそう打ち明けた。彼女のキャラは魔法使いで、炎の魔法で

敵を打ち倒しながらそんなことを言う。

【ふうん】

【やっぱり、おばあちゃんのことをまだ引きずってるのかなあ。カウンセリングの先生はそう言ってる】

椎名はおばあちゃん子で、小さい頃からずいぶん可愛がってもらっていたらしい。もちろん椎名もなついていた。

物心ついたときから一緒にいたおばあちゃんの死。通夜や葬儀で遺影の中の笑顔を見ても、もう一つ死んでしまったということがピンとこなかったという。

【確かにショックだったし、今でも思い出すと悲しいけど、引きずってるつもりはないんだけどなあ】

椎名のキヤラは汗マークのフキダシを発して困っていた。それでもゲームの中で会う彼女のキヤラは、いつも炎の大魔法で魔物を薙ぎ倒していたし、ときどき話を聞いている限り、徐々に発作も収まっていったようだ。

その頃、ぼくはぼくで人間関係に嫌気が差してきていた頃だった。周りとの感覚の違いに耐えられなくなってきてしまったのだ。お化け屋敷では怖くなくても怖がっているのが

楽しいのと同じで、みんな、恋愛というのをフリでやっているのだとずっと思っていた。

そうではなく本気らしいことをようやく理解し、試しに何人かと付き合った。女の子たちは、ぼくがお化け屋敷が怖くない人間だと知るや、一人で悩んで、一人で傷ついて、一人で結論を出し、一人で去っていった。

だからすっかり椎名が良くなったあと、オフで会った彼女に告白されたとき、ぼくはほとんどカウンターパンチで告げたのだ。好きにならないけどそれでもいいのか、と。

何を言っても信じてもらえないことに、いい加減、うんざりきていたから。

椎名は信じた。「じゃあ、あたしが海くんに恋愛感情を伝える伝道師になりましょう」何やら斜め上に意気込んでしまった。

以来、丸二年以上もぼくに引っ付いて、出来の悪い生徒を諭すようにしている。ぼくは困ってしまう。飽きたら去っていくものと思っていたのに。

椎名のこと、ぼくにはいつもよくわからない。

それまで付き合った女の子たちは、見えない壁に自分から必死に突進して行って、頭をくらくらさせているような子ばかりだった。けれど椎名はぼくが何者かなんて、あまり気にしていないらしい。

「痛がる海くんは新鮮だなあ」

縄跳びを手ににこにこ笑う椎名は、たぶんちょっと煮詰まって、変な方向に走り始めているのかもしれない。

「高杉さんの身体は今、ゆっくりと眠ろうとしているところなんですネ」

医師はホワイトボードに手際良く人間の身体の外形を描くと、脳味噌、心臓、胃や腸などの内蔵を書き足した。

椎名はパイプ椅子に座り、行儀良く膝の上に手を乗せて、ホワイトボードを見つめている。

「今は心臓がおやすみなさいをしたところです」

医師はそう言って、心臓から『Zzz』というフキダシを出した。

「これから時間をかけて、身体に残りのいろんな部分も、おやすみなさいをしていきます。肺が眠ります。おやすみなさい。腸も眠ります。おやすみなさい。肝臓も脾臓もみんな眠ります。おやすみなさい。胃もおやすみなさいして、最後に脳もおやすみなさいするんですね」

それでは私もおやすみなさい。医師がそう言ってベッドにもぐりこんでしまつのではないかと、ぼくは気が気ではなかった。

「まだ心臓しか眠っていないなら、心臓マッサージや電気ショックはどうなんですか？

あと、心臓を取り替えるとか」

「マッサージや電気ショックは効きませんでした。心臓移植も効果はないですね。身体全体が既に眠りはじめていますから。心臓を付け替えても、またすぐに眠ってしまいます」

「どうしてそんなにすぐ眠っちゃうの」

椎名が唇を尖らせてぼくを見やった。

「海くんがねぼすけなのがいけないんだよ」

「そんなこと言われても困るよ」

病院を出ると、太陽の光が目眩しい。陽の光が気持ちいいというのは、生きているときと同じだった。自分が死んでいるだなんて、どうにも実感が湧かない。生きている実感が湧かないのと同じくらい。実感がないので、葬儀の準備にもなかなか取り掛かれずにいる。

椎名がついてこない。しい、と後ろを振り向こうとしたとき、背中に痛みが走り、ぼく

はまた「いてっ！」と仰け反った。打ち込まれた部分が熱を持つ。

振り向くと、椎名がこちらを見ていた。手には縄跳び。鞆に入れて、持ってきていたらしい。

背中をさすりながら、ぼくはちよつと怒った顔をして椎名を見る。

「しい。昨日、もうしないって、言ってたよな？」

椎名はぼくから目を反らした。繰り返される虐待に、昨夜、いいかげんにしろと注意したのだ。椎名は神妙な様子で謝っていたのだが、わかっていないらしい。きちんと説教をする必要がある。

隣の公園へ連れ出すと、椎名をベンチに座らせた。椎名は縄跳びを握りしめた自分の手を見たまま顔を上げない。ぼくは立ったまま彼女を見下ろした。

「なんでおれを鞭打つんだよ？」

椎名は答えない。

「やめろって何度も言っただよな」

椎名は答えない。

「小さな子供じゃないんだぞ」

完全黙秘。

「しい。こつちを見ろよ」

「……だつて」

椎名は不満そうにぼくを見上げた。

「海くんがいけないんだよ」

「おれが何をしたの」

「心臓、寝ちやうから」

「おれの心臓が寝ちやうのは、おれのせいなのか？」

「誰のせいかわれれば、海くんのせいでしょ？」

誰のせいかわれれば、確かにぼく以外の人に責任の所在があるとも思えないので、ぼくは頷いた。

それで説教は終わってしまった。ぼくは口喧嘩が弱い。

説教を終えると、ぼくはベンチに座り、縄跳びを跳ぶ椎名を見やった。縄の長さが背に合っていないのか、何度も足を引っ掛けている。足が地面に着く音と回る縄がひゅんひゅんと立てる音が、単調なリズムを作る。

「しい。わかっておいてほしいんだ」

ぼくは真面目な声を出した。ひゅひゅん、と縄が大きな音を立てた。二重跳びを一回跳んだところで、椎名は足を引っ掛けた。

「おれは死んだんだぜ」

「でも、喋ってるじゃん」

「心臓が止まってる」

「それだけじゃん」

「生きてるのは、もう違うんだ。生き返ったりもしない。そのへん、ちゃんとわかっておいてくれよ。また喋れなくなったりしたら嫌だろ」

自分はおばあちゃんが死んだことを認めていなかったのだと思う　　すっかり喋れるようになったあと、椎名は自分の口でそう話した。

通夜も葬儀も出たけれど、椎名は泣かなかった。彼女の心の中の何処かは、それを現実だと受け入れていなかった。現実と彼女の心の世界の間に生まれた小さな隙間が、彼女から言葉を取り上げた。

同じことを繰り返させたくはない。

「別にいいもん。話せなくなっても。海くんはおかしいよ。どうしてそんなに簡単に、死を受け入れちゃうの」

ぼくは吐息をついた。「しいよりも大人なんだ」

「前はそんな風に言わなかったよ。きちんとおばあちゃんの話聞いてくれたのに。自分が死んだときはさっさと店仕舞い。そんなのヘンだよ」

別に、ぼくだって好きで店仕舞いしたいわけじゃない。ただ、現実問題、そうやってしまったのだから、仕方ない。

高校のとき、国語の授業の時間、人が人として生きていくために一番大切なものは何か、というアンケートがあった。ぼくは折り合いと書いて提出した。他の子の回答には、愛と夢と希望があふれていた。先生はぼくの回答を読み上げなかった。

自分に無いものを持っている人たちを、羨んでいたって仕方ない。嘆いているより今の自分を認めて進みたい。ぼくはそう思っている。死んだのだから、いまできることをしようと思う。

でも、ぼくの考えが椎名には歯痒いのだ。それはわかっている。でも、それは椎名が生きているから感じられることだ。自分の心臓が止まっていけないから。

「生き返れるかもしれないじゃん」

ぶすつとした声で、椎名は言う。それでぼくはまた、踏ん切りがつかなくなる。

「まだ、わからないじゃん」

*

しゃもじがエサを食べているところを見たことがない。しゃもじはいつも、空っぽのエサ箱の前に、行儀良くおあずけのポーズをして待っている。飼い主もいないのに、四つ足をびしりとそろえてエサを待つその姿に、ぼくはなんとなく親近感をもってしまう。

座ったしゃもじの姿はとてもさまになっていて、ぼくと椎名はしゃもじの前を通るとき、なんとなく拜んでしまう。しゃもじはちらりとこちらに目を向けはするけれど、おあずけの姿勢を崩さない。ちょっと居心地悪そうに目が泳ぐのが面白い。

「デート久しぶりだね」

アパートの外階段を下りてくると、椎名はしゃもじを拝み、ぼくの腕に両手を絡ませる。ぼくは彼女の右手にぶら下がった鞆の中を指差した。

「それ、置いてこようか」

「あはは。ばれた？」

忍ばせていた縄跳びを鞆から取り出すと、椎名はぺろりと舌を出した。

「縄跳び、だめ？」

「跳ぶの？」

「打つの」

「だめ」

椎名は、郵便受けの中に縄跳びを放りこむと、残念だなあ、と吐息をついた。彼女は相変わらず、ぼくを鞭打つことをやめない。

椎名が何故そんなことをするのか、よくわからない。死人が痛がるのが珍しいのかもしれないし、怒るぼくの反応が面白いのかもしれない。びっくりさせて心臓を叩き起こすつもりなのかもしれないし、単純に嗜虐癖に染まりつつある可能性も、なくはない。

なににせよ、打たれたら痛がつてやらなくてはと思う。椎名はぼくがまだ生き返ると信じている。死を受け入れる心の準備ができていない椎名に、ぼくの死をあまり感じさせてくはなかった。

電車を乗り継ぎ、遊園地へ向かった。車窓からの景色を見ていたら、つい霊園に目がいってしまつた。

「これから生き返るんだから、お墓の心配はいらないの」

気づいた椎名が不機嫌そうに、ぼくの顔を自分の方へ向けさせる。

「でも、どうやって?」

「私考えたんだけど、寝てるのを起こすのは、やっぱりショックじゃないかと思うのよね」

椎名は顎に手を当てると、さも名案のようにそう言った。死人が生き返るにはどうすればいいか、いろいろ考えた末の結論らしい。

「それはもう試したんだよ」

「どんなショック試したの?」

「電気ショック」

「電気ショックなんて、本物のショックって言えないでしょ」

ぼくの常識の中では、電気ショックほど本物のショックもないと思うのだが、椎名は気にしない。

椎名が目指したのは、遊園地の中のジェットコースターだった。ぐるりと一回転するや

つだ。

嬌声をあげる乗客たちを頭上に見上げながら、椎名は言う。

「私、ジェットコースターに乗るとね、心臓が早く打つの。だから海くんの心臓も、起きるかもしれない」

何処まで本気なのかよくわからない。

「絶叫マシーンで人が生き返るなんて話、聞いたことないけど」

「あれ。ない?」

「むしろ聞いたことあるのは、死んだ話の方だ」

「前例がなければ作ればいいの」

「ちよつと格好いいけど」

ぼくと椎名は都合三度ほどジェットコースターに乗り込み、ぐるぐると円を描いて回転した。落下中の胃が浮くような感覚は、生前と変わっていなかった。これは少し生きているっぽいなあと、急降下しながらぼくはちよつと感慨深い思いを抱いた。横では椎名がバ―にしがみついて、身を小さくして硬直している。椎名はジェットコースターが苦手だ。

「どう? 起きた?」

ふらふらになってジェットコースターから降りた椎名は、ぼくの左胸に顔を押し付けた。しばらく耳を澄ませていたが、やがて、どこまでねばすけなんだ、と文句を言った。

「次だよ。次」

おどろおどろしく飾り立てられたお化け屋敷を見上げ、椎名は「これはさすがに心臓も打つしかないね」と呟いた。そうかなあ、とぼくは応じた。お化け屋敷は苦手だったけれど、死人ともなると自信がついてしまう。一応、こちらは本場だ。

「じゃあさ。むしろお化けを怖がらせてやろうよ、海くん」

「趣旨がずれてる気がする」

大人二枚のチケットを買った、意気込み、中へと踏み込んだ。

出てきたときには、椎名はぐったりしていた。椎名はお化け屋敷も苦手だ。もう金輪際、お化け屋敷なんて入らない、と呟いた。途中で二度ほど、お化けの代わりにぼくが脅かしたことには気付いていない。暗闇は便利だ。

缶ジュースを買ってくる間には、回復したようだった。椎名はベンチに座り込んで、ぶらぶら揺れる自分の脚を見下ろしていた。

コーラの缶を受け取りざま、ぼくの左胸に顔を寄せた。

しばらく耳を澄ませていたが、やがて、やる気あんのか、と文句を言った。ぼくはプルタブを開け、コーヒーに口をつけた。

「ねえ海くん。この子、やる気あんの？」椎名がぼくの左胸をつつく。

「やればできる子だとは、思っただけど」

「そういう子、甘やかしちゃだめだよ」

椎名はひとしきりぼくの左胸に小言を飛ばしていたが、やがて大きく吐息をついて、じつとぼくを見上げた。

「で、海くんはやる気あるわけ？」

笑って誤魔化した。

「笑って誤魔化さないの」
ばれている。

「生き返る気はあるのですかと訊いています。さあどうでしょうか。お答えください」

「そりゃあ、あるさ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「どうせ私の気が済むなら、とか思ってるんでしょ？」

ばれている。椎名はこれで結構、鋭いところがある。

「私のことは良くて。海くんは、生き返りたいって思わないの？」

どうも逃がしてもらえないらしい。椎名の表情が真面目だ。

答えに窮した。自分でもよくわからない。自分の胸の裡を見回してみても、どうしても生き返りたいという気持ちは見当たらなかった。ぼくはただ、椎名や周りの人たちに、出来るだけ笑っていてもらえれば、それでいいと思う。それすらできないのだったら、ぼくの人生は、本当になんだったのかということになってしまう。

でもそれを椎名に言うのは躊躇われた。椎名はぼくを生き返らせたいし、ぼくに生き返りたいと欲してほしいのだ。だからぼくは嘘をつく。

「生き返りたいに決まってるだろ」

椎名は唇を結んで眉ひとつ動かさない。彼女にはぼくの嘘などすべてお見通しなのだと思う。私のこと好きになった？ と訊いて、ぼくの返答を聞いたときと同じ表情をしている。ぼくは彼女が可哀想になる。

「まあ、その話は置いてさ」

ぼくは話を反らした。

「次、なにか乗ろうぜ」

言って、背を向けた瞬間、攻撃が来た。

油断していたのがつりくらった。縄跳びではない。もう少し重く鈍い感触。

背中を抑えて振り向くと、椎名は革のベルトを手にしていた。スカートに巻いていたのを、外して振るったらしい。さすがに取り上げるわけにもいかない。

「ふんだ」

椎名はベルトを付け直すと、ぼくの手を引き次のアトラクションに向かった。怒っている。話を反らしたのが良くなかったようだ。

ジェットコースターとお化け屋敷を完遂すると、ショック系はなくなってしまった。仕方ないので、メリーゴーランドでぐるぐる回ったり、コーヒーカップでぐるぐる回ったりした。椎名はむっつりと押し黙ったまま、物凄い勢いでコーヒーカップを回し、係員に注意された。

「意地でも寝てる気だな」

帰りの電車の中、ぼくの左胸に耳を当てながら、椎名は世にも不機嫌そうに鼻を鳴らし

た。

「絶対起こしてやる」

しばらくぼくの左胸に耳を当てていたが、やがて寝息をたてはじめた。疲れたのだろう。あまり根を詰めて、体調を崩したりしなければいいのだけれど。死んでいる立場で言うのもなんだが。

アパートへ帰りつき、二人でぐっすりと眠った。

いつも寝る前にはおやすみなさいを言っていた彼女だが、その日から言わなくなった。

*

人の死にまつわる手続きは様々だ。医師に貰った名刺の葬祭業者に連絡をとり、今後の段取りを相談した。

（またそんなことして！ もっと真面目に生き返ること考えてよ！）

ぼくが葬儀の準備をしていると、椎名は怒る。

（考えてるよ）

（じゃあ、そんなもの書かないでよ）

椎名は葉書を指さして口を尖らせる。告別式の招待状だ。葉書には一葉一葉、あまり湿っぽくならないように言葉を選んで、筆ペンで友人たちへのメッセージを書き入れていた。（お気軽にお越しください、じゃないでしょ。生き返るんだから葬儀なんて必要ないの！）（それとこれとは話が別だろ）

（別じゃない！）

椎名はこの頃力リカリしている。振るわれる鞭も、だんだん容赦がなくなってきた。思いつめた様子の椎名に、参っていないか、ちよつと心配だ。

とはいえぼくの方も、あまり余裕がない。死んだ直後はなんとも思わなかったけれど、この頃、悩む時間が増えた。意味もなく気分が沈んだりして、若干塞いでいる。

葬儀の手配をしていると、少し気が紛れるのだ。自分がいま自分でやるべき範囲のことで、働いている気がして落ち着いた。地に足がついた感じがする。死んでいる立場で言うのもなんだが。あまり生き返ることについてばかり考えていると、息が詰まってしまふ。

作業を一段落させると部屋を出た。椎名は高名な霊能者の話を聞きに出掛けている。

駅前を行き交う人たちは、みな生きている人ばかりなのだろうか。椎名の実家の最寄り

駅へ、路線図をチェックした。椎名のお母さんへ、今後のことを相談しておかなければいけない。

ホームで電車を待っていると、男が目についた。襟元のくたびれたYシャツ。片手に擦り切れた鞆をぶら下げている。白線のぎりぎりに立って、どこか虚ろな瞳で線路の方を眺めている。

飛び込む気だ。直感的にそう思った。

男はどろんとした目で宙を見つめている。生きているくせに、なんでそんな目をするのだろう。ぼくの方が、まだ生きているっばい目をしている。幽霊が仲間を招きたくなるのは、こんな気持ちなのかもしれないと、ふと思った。

まもなく電車がやってくる、とアナウンスが告げた。男の視線が、近付いてくる車体へ向いた。足がふらふらとホームの端へと動いた。

ぼくは吐息をついた。

「よしといった方が」

背中に声をかけると、男はびくつと震えた。彼の中で、超えそうになっていた針がぎりぎりのところで戻るのを感じた。男が振り返るよりも早く、ぼくはそそくさとその場から

離れた。

ホームの端から目をやると、男はベンチに座り込み滑りこんできた電車を呆と見つめている。

自分にはないものを持っている人たちを、羨んでいたってしかたない。

思い出の中にしか存在できないのなら、きつと誰だって精一杯、格好をつけなくなる。

ぼくはそう思う。

椎名のお母さんとひとしきり談笑してから帰宅すると、疲れきった椎名が出迎えた。

「何処行ってたの、海くん。こんな時間まで」

じと目で言うその目の下には隈ができています。手に持ったOA用紙の束には、霊能者のパンフレットと一緒に、西洋蘇生魔術についての記事がプリントされていた。

「しいのお母さんのところ」

「何しに」

「一応、今後の相談をさ。しいも一人じゃ大変だろうし。うちのおふくろも、そのうち来るとは言ってたけど、あてにならないしさ。いろいろ大変だろ」

「ねえ」ぼくの言葉を聞くと、椎名は大きくため息をついた。「……海くん、生き返る気、
なくない？」

「そんなことはないよ」

軽く笑いながら、横を通り過ぎる。

予想通り、風切音。ピシリ。

「いてえ！」

背中を押さえて後ろを振り向くと、椎名は真剣な目でぼくをみつめていた。

「海くんは私として楽しい？」

椎名は訊く。それを確認しておかなければ不安でならないみたいに。

「楽しいぞ」

ぼくは答える。

本心だ。

ぼくは椎名を大切に思っている。

「死んじやって悲しくないの？」

椎名は確認する。

「まあ、それほど悪くはないよ」

椎名はしばらく、ぼくの顔をじっと見ていた。

それから、そうかあ、とちよつと気が抜けたように笑った。久しぶりの緩んだ顔だった。

「そういうもんなのかな」

「そういうもんだ。しいが思い詰めすぎなんだよ。もうちよつと気楽にやろうぜ」

椎名には、ぼくのことに関して、心残りを残したくない。ぼくは無念の死を遂げるより、
笑って死んだ方がいい。彼女もぼくとの別れを受け入れやすいだろう。

普通の恋もできないままぼくを慕ってくれた椎名に、心の傷だけ残したくなかった。た
ぶん、ぼくが取り戻したいのは、命というより、椎名と過ごす穏やかな時間の方なのだ。
鞭打たれるとぼくは痛がる。いてっ、と大げさにリアクションをとる。上手く痛がれた
かがとても気になる。もう少しだけ、生きているふりをしていたかった。

本当は、段々痛くなくなってきたから。

葬儀の準備は着々と進む。煩雑な手続きを着々とこなしている間は、余計なことを考えなくて済む。つつい集中してしまつて、進みが早い。そんなに急いでやることないじゃん、と椎名は不満げだ。でもそうもいかない。

ぼくの身体は眠りつつある。そのうち全部眠つてしまふ。自分の死後の手続きを、椎名にやらせるのは忍びない。そう思つてやっているのに、椎名は氣に入らないらしい。

「ご遺族が納得していないなら、無理して進めなくてもよろしいんじゃないですかね」

ぼくらのやり取りを横で聞いていた葬儀屋が、こらえきれなくなつたように笑つた。行儀のいい正座をこなし、屈託なく笑うおばさんだ。

「お葬式っていうのはね、気持ちの問題ですから。亡くなつた方が早くお済ませになりたい気持ちは、勿論わかりますけどもね。そんなに急ぐこともないと思いますよ」

最近の死人の方には多いですよ、と葬儀屋は言う。

「私も長いことこんな商売やっていますから、亡くなつた方はよくわかるんです。

皆さん、人が死んだときはぐずぐずしてるくせに、自分が亡くなるとさつさと葬儀を済ませようとなさるもんだから。遺族の方が可哀想ですよ」

そうそう、と横で椎名が頷いている。そういうものでもないだろうとぼくは思う。

葬儀をしないと、椎名がぼくが死んだことを割り切れないだろう。ぼくはぼくで、きちんと区切りをつけないと、居心地が悪い。死んだという実感がないまま死んでいると、自分がどうしていいか、自信が持てない。

ぼくがそう言う、と、椎名と葬儀屋は顔を見合わせ、男の人は柔軟性が無くて駄目ね、と笑つた。そういう問題じゃない。

「海くん、怒ってる？」

納得がいかないまま葬祭場を出た。ぼくが黙つて歩いていると、椎名は後ろから追いつきざま、ぼくの顔を見上げて覗きこんだ。

「……なんで？」

「なにか、怒ってるっぽく見えるから」

「別に怒ってない」

ただ、死人の気持ちなんて、生きてる奴にはわからないんだと思つただけだ。死んだままこうして生者の世界を歩いている不安なんて、きつとわからないんだ。

「あ、海くんが拗ねてる。拗ねてるっぽい。可愛い」

椎名はぼくの氣も知らず、面白そうにきゃっきゃと笑う。その笑顔に、何故だか無性に

腹が立ってしまったって、ぼくは椎名の唇に自分の顔を寄せキスをした。それがぼくを好きな彼女にとって、特別な意味があることも、ぼくにとっては意味のない行為であることを、彼女が知っていることも承知の上で。

唇を離れた。椎名は突っ立っている。

ぼくは意地悪な気分になっている。

「行くぞしい」

背を向けると、風が唸った。

「いてっ……」

ぼくは背中を抑えて跳び上がる。

振り返ると、椎名は縄跳びを握りしめてぼくを睨んでいる。冷え冷えとした声で言った。

「今のキスはない」

「……ごめん」

「海くんのキスに愛がこもってないことくらい百も承知。承知の上で欲しいときもある。でも今のは酷い」

「悪かった」

椎名は何も言わずにまた縄跳びを振るう。胸に当たり、ぼくはまたいてっ、と呻いた。本当は、ほとんど痛くない。痛覚は急速に鈍りはじめている。

こんなことするんじゃない。きつと、唇ももう冷たかっただろう。

お詫びにご馳走することになった。レストランに入ったが、食欲は湧かなかった。胃もだいぶ眠ってきているのだ。無理に詰め込むと、消化できなくて、胃の中で腐ってしまうのではないだろうか。腐臭を椎名に嗅がせたくはない。

「海くん、食べないの？」

「あまり腹、減ってないんだ。葬祭場で茶菓子食ったし」

ぼくはぱんぱんと腹を叩く。おっさんみたいだね、と椎名は冷たく言う。

本当は、生きているふりなどしてはいけなのだろう。味覚がもう眠りはじめていることも、伝えるべきなのかもしれない。でも、言えなかった。

アイスクリームだけ食べることにした。胃が働いてくれなくても、勝手に溶けてくれるから大丈夫かなと思った。椎名がハンバーグを切り分ける前で、ぼくは器に盛られた冷たい塊にスプーンを差し込む。

「海くん、アイス好きだったっけ」

「死ぬと味覚も変わるもんでね。冷たいものが好きになるんだ」

ふうん、と椎名は切り身の肉を口に運ぶ。

そういえば、と思い出したように呟いた。

「昔ね、手が冷たい人は心が温かいのよ、って近所のおばさんに言われたんだけどね」

ぼくはアイスクリームを完食する。

うまかった、と手を合わせた。味はあまりしなかった。

「じゃあ一番優しいのって死体なんですねって返したら、笑われちゃったの」

椎名は切り分けたハンバーグを噛みしめながら、納得いかないなあ、と呟いた。

二人でベッドに入ると、椎名は縋りつくようにぼくの胸に頬を寄せる。左胸に耳を当てさせるのが忍びなくて、位置を交換した。

寝入っていると、衝撃が来る。ぼくは急いで目を開けて、身体をびくと起こす。こら、しい、と怒った声で椎名を見上げると、縄跳びを握りしめた椎名は、ぼくに怒られて、どこか安堵したような顔をする。

怒る気などない。でも怒らなければ。痛くはない。でも痛がらなければ。あとどれだけ

きちんと飛び起きることができかわからないけれど。

自分が死んでいることは悲しくない。でも椎名を悲しませたくない。

でもこんなことを続けていたら、彼女はぼくがいなくなったあと、また喋れなくなってしまうんじゃないか。

海くん、と椎名が寝言を言った。

起きてるよ、とぼくは呟く。

*

身体に残った痕の治りが遅い。

鏡の前で身体を捻り、背中を見る。赤と紫と青が混じった痣が刻まれている。椎名の度重なる虐待の痕跡だ。前はすぐにもとの肌色に戻っていたのに、治りが遅い。がたつ、と洗面所のドアが音を立て、ぼくは慌てて振り向いた。

「ちよつと海くん。なに鍵なんてかけてんの」

扉を開けると、椎名が眉を顰めていた。ぼくは既にシャツを着込んでいる。

「思春期の高校生じゃあるまいし。洗面所に立て簞らないでよ」

「自分の肉体美に惚れぼれしてたんだ」

横を通り過ぎるとき、椎名は背中からぼくのシャツに手をかけ、ぐいと引っ張り上げた。鞭にはいつでも反応できるように警戒していたのだが、これは予想外だった。

ぼくの背中を見た椎名は、しばらく黙ってから、むうと唸った。

「もう打たない方がいいのかな」

「いや、全然大丈夫だけど」

「むしろ打ってって?」

「そんなことは全然ないけど」

朝食を胃に収め、消化促進の胃薬を飲むと、二人で出掛けることにした。季節はもう春だ。

外に出ると、しゃもじがエサを食べていた。エサ入れに口を突っ込み、固形状のドッグフードをもしやもしやと咀嚼している。

「食べてる」

「食べるんだ、しゃもじも」

「だまされた」

しゃもじはきつとエサなんて食べずに、永遠におあずけをして待ち続けているのではないかと思っていたのに。

太陽の光が視界の隅で輝いている。あまり眩しさは感じなかった。フィルムを通したようにどこか薄暗い。虹彩が眠ってきているのかもしれない。

明るくて気持ちいいね、と椎名が言った。

そうだな、とぼくはあくびを噛みこらした。

「眠いの?」

「んー、眠くなる陽気だからなあ」

起きろー、と椎名はぼくを鞭打つ。いてえっ、とぼくは跳ねてみせる。

映画館では、近頃流行りのSF映画を観た。真っ暗な中で座っていると、次第に眠くなってきた。昔、こうやって椎名と映画館に行った。あのときも、ぼくは眠くなるのを必死に我慢していたような気がする。

「海くん、眠いの?」

映画館を出ると、椎名が訊いた。

「眠そう」

「映画が面白くなかったからだ」

「えー、せっかく選んだのに」

椎名は唇を尖らせてぶつぶつと文句を言う。椎名はぼくの嘘を見通すのが得意だけれど、知って知らぬふりをするのも得意だ。

とても眠い。

死ぬこと以外に、何か眠くなる理由ってないんだろうか。

「映画館でしょ。美術館でしょ。ホテルで食事をして、成り行きに任せる。海くん、私を襲ってみない？ 生き返るかもよー」

「興味ないよー」

「酷いね。酷い。海くん、眠いの？」

「だって椎名の話が退屈なんだもん」

椎名は無言でぼくの尻を蹴る。つてえ！ とぼくはかるうじて反応して跳ねる。上手くできているか自信はない。痛みも感触も、もうなかった。

今になって思う。生きているときにぼくはもう少し、彼女にこうやって反応してあげれば良かったと。痛くなくても、感触がなくても、こうやって大袈裟に飛び跳ねてあげれば良かったのだ。

彼女は死者に鞭打ちたくなるほど、とても寂しかったのだろうに。

歩いていると、椎名がついてこない。どうした？ と振り向くと、なんでもないよと笑って走ってきた。

「ねえ海くん。私のこと好き？」

「だから、しいはと言ってほしいんだよ」

「だから、それは訊いちや駄目なの」

美術館に向かう道をぼくらは歩く。また歩いていると、椎名がついてこない。どうした？ と振り向くと、彼女はうつむいて地面を見ていた。

その手に縄跳びが握りしめられていることに気付き、ぼくは自分の失敗を悟った。

「……痛くないんだね」

椎名が呟いた。

「我慢しただけだよ」ぼくはでまかせを言う。「おれ痛がると、しいが喜ぶから……」

「海くん、もう痛くないんだね」

縄跳びを握りしめる椎名の手が震えている。溺れてしまって、必死に縋りついているように。歯を噛みしめている。調子っぱずれにカタカタ鳴った。

「痛くないのに、痛がってたんだ」

「違う。痛い。痛いぞ、しい」

「私をだましてたんだ。海くんは嘘つきだね」

耐え切れなくなつたように、椎名が縄跳びを振りかざした。

ひゅんという風切音に、反射的に庇った右腕を、ぴしりと縄が打った。

「いてえ！」

「嘘じゃん！ 痛くないんじゃない！ 海くん、もう眠っちゃったんじゃない！」

「痛いつて。しい！ 痛いつてば！」

「嘘つき！」

椎名は泣き出しそうに顔を歪める。もうどうしていいかわからないように縄跳びを振るう。ひゅん、と今度は左肩にきた。ぴしつと音がする。「つてえー！」

「おかしいじゃん！ 今の痛がり方変じゃん！ 左肩に当たったのになんで左に跳ねるの？」

「？」

「悪いかよ！」

「ほんとに痛いんだつたら、右に跳ねてよ！」

「痛がり方は人それぞれだろ！ そこに指図は受けない！」

「痛くないなら痛くないつて言えばいいじゃん！ 嘘じゃん。海くんの言うことなんて、みんなみんな嘘じゃん！」

「しい。いい加減にしないとおれも怒るぞ いてえ！」

ぴしつ、ぴしつ、と縄跳びを当てながら、椎名は泣いていた。目から大粒の涙があふれて、ぼろぼろ頬を伝って落ちた。いてつ、と身体を庇いながら、ぼくはそれだけ見届ける。おばあちゃんが死んだとき泣けなかった彼女。ぼくが死んでからまだ泣いてなかった彼女。ようやく泣けた。鞭を振るいながら。

「やだよ、海くん」しゃくりあげながら、椎名は縄跳びを振るう。「死んじゃだよ！」

「いつてえー！！ こら、しい。おまえもうちょい加減しろ！ こんなんされたら、ほんとに死ぬだろ！」

「痛くないんだからいいじゃん！」

「そういう問題じゃないだろ！ 痛いつて！ 痛いつてえ！」

椎名は泣きながらぼくにむしゃぶりつく。冷たい体温と固くなりはじめた皮膚を彼女に感じさせたくなくて、ぼくは一步後ろに下がったけれど、彼女は小さな子供のようにはぐに縋った。海くん、海くん、としゃくりあげながら、それでもぴしぴしとぼくの背中に縄跳びを当てる。ぼくにはもう椎名の身体を感じる皮膚感覚はないし、痛みを感じる痛覚もないけれど、それでも、いつて！ と痛がつてみせる。泣きじゃくる彼女を見ながらぼくははじめて、自分が死んでしまったことを、自分のために少しだけ悲しいと思った。

椎名はぼくのシャツに涙と鼻水をなすりつけながら縄跳びを振るう。いつて、いつて、とぼくは飛び跳ねる。

きつともう少ししたら、二人ともなんだかもう馬鹿らしくなって、笑いはじめてしまうだろう。椎名はぼろぼろ泣きながら、いつもの笑顔に戻るだろう。

だからその時のためにもう少しだけ、ぼくは打たれる。

「いつてええええ！！」

視界の隅で、あの人たち何やってるの、と小さな子供がこちらを指さした。

見ちゃいけません、とお母さんが、その手を引いて足早に連れていった。

「本日はお忙しいところ私の葬儀にお集まりくださり、どうもありがとうございました。故人を偲ぶエピソードでも披露しようかと思っていたのですが、なんか眠いのでやめておきます。本日まで故人にお付き合ひ頂き、誠にありがとうございました」

読経と記念撮影を終え、ぼくが最後の挨拶をすると、参列者たちは拍手して合掌した。ぼくは恥ずかしくなり、早々に棺桶に引っ込んだ。着慣れない白装束が、なんだか照れくさい。

棺桶に収まってじっとしていると、参列者が花を一本一本、頭の周りに置いていく。目を合わせて笑いかけると、皆もじゃあな、と笑って手をあげた。

椎名は花と一緒に縄跳びを入れた。天国でも誰かが海くんを鞭打ってくれますように、とにやりと笑んだ。それは勘弁してほしい。それから、ぼくの唇にキスをした。ピイツと誰かの口笛が響いた。

火葬場は混んでいた。ぼくはうつとしながら順番を待った。熱いですか、と係の人に訊くと、サウナみたいなものだね、ということだった。入ったこと、あるんだろうか。

順番が来ると、棺ごと火葬炉の中へ入ることになった。最後の別れということで、皆がぼくの顔をじつと見るので、つい眠ったふりをしてしまった。

椎名にはお見通しだったようだ。ぼくの耳もとに顔を寄せた。そうして毎晩やっていたように、その挨拶をささやいた。

「おやすみなさい。海くん」

「おやすみ。しい」

暗い炉の中で、火がかかるのを待ちながら、ぼくはうつと夢をみる。ぼくと椎名で縄跳び競争をしているという、変な夢だ。負けが込んだ椎名は、苛立ってぼくを鞭打ちはじめる。ぴしっ、ぴしっ、と音がする。

いたいよ、しい。

炉が温かくなっていくを感じながら、ぼくは眠りへと落ちていった。